

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 30

Carl Perkins 【カール・パーキンス】

～西海岸で活躍した名ジャズ・ピアニスト～

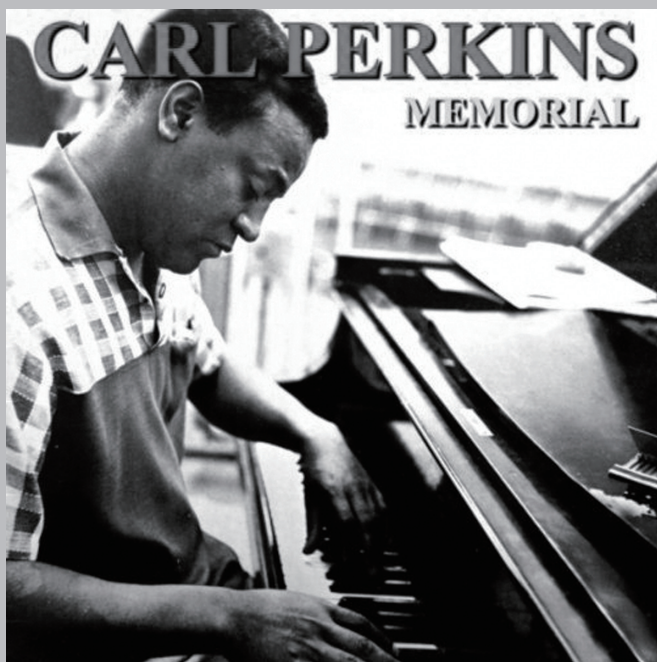


Photo: Carl Perkins Memorial / Carl Perkins (Fresh Sound Records: FSRCD-099)

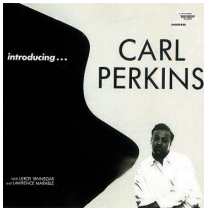
Profile

1928年8月16、米国イリノイ州インディアナポリスで生まれ。幼少期に受けた事故により、左手が曲がった状態のままという不自由な身でありながら、9歳の時にピアノを弾き始め、独学で独自の奏法を開拓した。ベーシストのエド・パーキンスは実兄。46年にクリスマス・アタックス高校を卒業後、2年間軍に入隊。48年にタイニー・ブラッドショウのR&Bバンドでプロ活動を開始。その後、ビッグ・ジェイ・マクニーリーのバンドにも参加。49年にロサンゼルスに移住し、その後はウエスト・コーストを拠点に活動。50年にマイルス・デイヴィス(tp)と共演。51~52年の間に再び入隊。53~54年にオスカー・ムーア(g)のトリオ、54年にクリフォード・ブラウン(tp)も在籍した初期マックス・ローチ(ds)のクインテットに加入。54年に短期間の間再びオスカー・ムーアのバンドに参加。55年より自己のトリオで活動を始め、翌56年に唯一のリーダー・アルバム『イントロデュシング...』を発表。互いのリーダー・アルバムでの共演の他、多くの名演を残した盟友リロイ・ヴィネガー(b)との活動の他、56年からカーティス・カウンス(b)のグループに在籍。その他、ディジー・ガレスビー(tp)、イリノイ・ジャケー(ts)、デクスター・ゴードン(ts)、アート・ペッツァー(as)、チェット・ペイカー(tp)、ハロルド・ランド(ts)等、多くのアーティスト達と共演し、独特のブルース・フィーリングとグルーヴ感溢れるプレイで好サポートを演じた。自己のグループのお披露目ライブを控え、また、才能溢れるジャズ・ピアニストとして広く認知され始め、更なる飛躍を期待されていた最中の1958年3月17日、交通事故により急死。遺体は地元インディアナポリスに埋葬された。享年29歳。

CP's Great Album

リーダー作は一枚のみだが、左頁に掲載のジャケット作品はカールの急死により急遽リリースされた3つのセッションからのレア音源集。他にも多くの名演が残されている。

生涯唯一のリーダー・アルバム

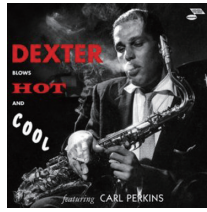


Introducing The Carl Perkins Trio
Carl Perkins Trio
(Fresh Sound : FSRCD-010)

カール・パーキンス (p)、
リロイ・ヴィネガー (b)、
ローレンス・マラブル (ds)

1. ウェイ・クロス・タウン
2. ユー・ドント・ノウ・ホワット・ラヴ・イズ・3.
- ザ・レディ・イズ・ア・トランプ
4. マーブルヘッド (他、全11曲)

したデクスター・ゴードンの名盤

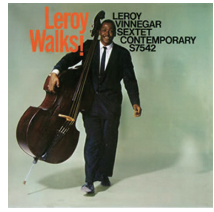


Blows Hot And Cool
Dexter Gordon
(Fresh Sound : FSRCD-1601)

デクスター・ゴードン (ts)、ジミー・ロビンソン (tp)、カール・パーキンス (p)、リロイ・ヴィネガー (b)、他

1. シルバー・ブレイテッド
2. クライ・ミー・ア・リバー
3. リズム・マッド
4. ドント・ウォーリー・アバウト・ミー (他、全9曲)

本誌由来リロイ・ヴィネガーの名盤



リロイ・ウォークス!
リロイ・ヴィネガー
(ユニバーサル・ミュージック : UCCO-9793)

リロイ・ヴィネガー (b)、ジェラルド・ウィルソン (tp)、テディ・エドワーズ (ts)、カール・パーキンス (p)、他

1. ウォーク・オン
2. ウッド・ユー・ライク・トゥ・テイク・ア・ウォーク
3. オン・ザ・サニー・サイド・オブ・ザ・ストリート (他、全7曲)

1955~56年にドウトゥーンというマイナー・レーベルで録音された盟友であるウォーキング・ベースの職人リロイ・ヴィネガーとドラムのローレンス・マラブルとのトリオによるカール唯一のリーダー作。冒頭のカールのオリジナル「ウェイ・クロス・タウン」で聴かせる黒っぽいスイング感は絶品。ラストの「カールス・ブルース」も今や名曲といえるナンバー。特にカールのピアノとリロイのウォーキング・ベースの相性は最高です!

この渋いジャケットだけでも価値あるデクスター・ゴードンの名盤。1955年に録音された作品だが、本作録音から3年後の1958年に急死したカールに捧げるべく、後にジャケット下に“featuring Carl Perkins”と記された。カールのピアノにベースはリロイ・ヴィネガー。ウエスト・コーストを代表する名手達によるサポートを受けてデクスの重厚でメロウなテナーが炸裂。中でも「クライ・ミー・ア・リバー」は最高の名演。

カールと同じインディアナポリス出身で、誕生日も約1ヶ月違いのウェスト・コーストを代表するベースマンで“ウォーキング・ベースの職人”と称されるリロイ・ヴィネガーが1957年に録音した初リーダー作。1曲目の「ウォーク・オン」で聴かせるカールの哀愁溢れるピアノ・ソロは鳥肌もの。低く重く太く力強く、時々スキップしながらこちらに迫り来るリロイのベースとブルージーで哀愁漂うカールのピアノの絡みが絶妙です。

フォー・カール

「ブルー・スウェード・シューズ」で有名なロカビリーの神様＝カール・パーキンスと同名同名。ジャズ・ピアニストのカールは交通事故のため、1958年に29歳という若さでこの世を去ったが、不自由な左手のハンディなど微塵も感じさせず、ブルージーで哀愁たっぶりのそのピアノは、日本人の心にもグッと染み入る。盟友リロイ・ヴィネガーの2枚目のリーダー作『リロイ・ウォークス・アゲイン!』(62-63年録音)に「フォー・カール」というナンバーが収録されているが、リロイが亡きカールに捧げた感動の一曲。機会があれば一度聴いてみて欲しい。

カール・パーキンス・メモリアル

左頁に掲載のジャケットは『カール・パーキンス・メモリアル』と題されたアルバムのもので、リロイ・ヴィネガー・カルテットにハービー・マン・カルテット、カーティス・カウンス・クインテットでカールが演奏した音源9曲を収めたレアな一枚。そのライナーの最後に、リロイ・ヴィネガーをはじめ、カーティス・カウンス、ハロルド・ランド等、なじみ深い共演者達の追悼メッセージが記載されているが、1950年に共演歴があるマイルス・デイヴィスがピアニスト達に持っていて欲しい資質と共に度々カールの名を挙げていたことも記されている。

Jazz Standards (ジャズ名曲列伝) Vol.3

~ On Green Dolphin Street [オン・グリーン・ドルフィン・ストリート] ~

この曲はポーランド出身の作曲家ブノイスロウ・ケイパーが、ヴィクター・サヴィル監督、ラナ・ターナーが主演した1947年製作のアメリカ映画『大地は怒る(原題: Green Dolphin Street)』のテーマ曲で、嘗て恋の舞台だった通りの思い出を歌った楽曲として作曲したナンバー。後にネッド・ワシントンが作詞した。マイルス・デイヴィスやウイントン・ケリーの名演をはじめ、ジャズのスタンダード・ナンバーとして長年愛され、親しまれ続けている。

★ この名曲が聴けるお薦めのアルバム

- マイルス・デイヴィス 『1958マイルス』
- ウイントン・ケリー 『ケリー・ブルー』
- デューク・ピアソン 『テンドラー・フィアリング』
- エリック・ドルフィー 『アットワード・パウンド』
- ビル・エヴァンス 『グリーン・ドルフィン・ストリート』